

論文の和文要旨

論文題目

ムンサラット・ロッチ文学における
カタルーニャ的特質について

氏名

保崎典子

作家兼ジャーナリストとして活躍したムンサラット・ロッチ(1946-1991)はバルセロナ出身のカタルーニャ人である。カスティーリャ語で教育を受けて、日常生活でカタルーニャ語を話すカタルーニャ人は、一般にバイリンガルであると言われており、彼女もカスティーリャ語とカタルーニャ語で作品を著している。しかし、カスティーリャ語の作品は数冊のルポルタージュや他の作品の序文などにとどまり、その他の、小説をはじめとする主な作品はすべてカタルーニャ語で書かれている。母語と習得した言語を厳密に使い分けることによって、ムンサラット・ロッチはバイリンガルであることをきっぱりと否定しているのである。その根底には自分はカタルーニャ人であるという強い自己主張があり、それはまた、カスティーリャの文化を押し付けたフランコ体制への異議の申し立てでもある。

しかし、カタルーニャ人としてのロッチ研究は十分であるとは言えない。というのも、1975年のフランコ体制崩壊直後に若い女性作家たちが台頭して、一つのグループを形成するようになったとき、ムンサラット・ロッチもそのグループの一員とみなされて、その方面から研究されるようになったからである。彼女たちは、それまで語ることがタブーだった女性問題を取り上げて、語りの形式にも独自の工夫を凝らした。ロッチの初期の作品には同じ傾向が顕著に見られるので、初期のロッチ研究のほとんどがフェミニズム的観点からなされたのは不思議ではない。しかし、初期の作品でさえも、カタルーニャ語で書かれているだけではなく、カタルーニャの歴史・地理・文学にも頻繁に言及している。後期の作品になると、ますますその傾向は強まり、多様な視点からカタルーニャを検討している。したがって、彼女の小説を「女性」という観点からだけ論じるなら、作品のもう一つの主要なテーマを見落とすことになるだろう。なぜなら、ムンサラット・ロッチは、「女性」として「カタルーニャ人」として小説を書いているからである。

本稿の目的は、彼女の5つの長編小説すべて、すなわち、『さらばラモーナ』(1972)、『さくらんぼの実るころ』(1976)、『すみれ色の時刻』(1980)、『日常オペラ』(1982)、『妙なる調べ』(1987)を取り上げて、これまでほとんど論じられることのなかった、ロッチ文学におけるカタルーニャ的特質を明らかにすることである。しかし、それは、「女性」問題に触れないということではない。なぜなら、彼女にとって、カタルーニャ人であることと女性であることは切り離すことのできないアイデンティティだからである。

5つの長編小説はそれぞれ独立した小説として上梓されているので、どの小説から読み始めてもそれなりに堪能できるが、順を追って読むと、小説を通してロッチ自身の変化を捉えることができる。その核にあるのが内戦である。『さらばラモーナ』では、プロローグとエピローグにまたがって内戦のエピソードが別個に挿入されているし、その他の4つの長編小説の舞台設定は「現在」と言うべき小説が書かれた時代であるが、その「現在」の中に、フラッシュ・バック、小説、日記など様々な形式で、「過去」と言うべき内戦、またはその前後の時代が混在している。ムンサラット・ロッチは、常々、人は多くの記憶の所産であり、現代に生きている人間は、良きにつけ悪きにつけ、何らかの形で過去の遺産を受け継いでいるので、自分が生きている社会について疑問があれば過去に遡らなければならないと主張している。したがって、彼女が常に内戦に遡るのは、「現在」の問題を解く鍵をたどっていくと常にそこにたどり着くからであろう。

しかし、彼女は内戦前後の状況をいつも同じ視点から眺めているわけではない。なぜなら、彼女自身も歴史的な存在であり、歴史の変化に応じて視点を変化させずにはいられなかったからである。特に、彼女が生きた時代は、フランコによる独裁制から、不安定な《トランシション》期を経て、民主主義の時代に至るといふ、激動の時代であった。大きな体制の変化は体制側にも反体制側にも等しく混乱をもたらす。ムンサラット・ロッチもフランコ体制崩壊後しばらくして精神的な危機に陥った一人であり、それが小説に反映されている。フランコ体制時に書かれた最初の2作にはカタルーニャ対カスティーリャという対立が顕著だが、《トランシション》期に上梓された『すみれ色の時刻』では、その対立は何だったのかということが疑問に付されている。その後の2作品ではロッチの視点が大きく変化しており、カタルーニャにも抑圧の装置があったことを鋭く指摘している。

ムンサラット・ロッチの包括的な研究としては、キャサリン・デーヴィスとクリスティナ・デュプラアが挙げられる。しかし、作品ごとに論じた、その研究はやや作品紹介にとどまっている感があり、そこから作品と作品の関連や、時代の変化とそれによる著者の視点の変化を読み取るのは難しい。というわけで、本稿では、ロッチの問題意識の変化や過去の解釈の変化をより明確に捉えるために、あえて、作品をばらばらにして時代ごとの区分による考察を試みたい。大まかに、内戦前、内戦、内戦直後、現在に区分するが、小説の時代が錯綜しているので、それほど正確に区分できるわけではない。特に、「内戦前」にあたる第一章では19世紀後半から1960年代後半までを描いている『さらばラモーナ』を中心に取り上げるので、概ね、内戦前について論じるが、内戦中や1960年代後半の時代にも触れることになる。

さて、第一章「カタルーニャの女の『内—歴史』(この語については本稿第一章第2節参照)—伝統的役割に生きる女たち」では、まず、歴史的なカタルーニャの言語状況から女性とカタルーニャ語の関係を分析し、次に、ラモーナという名を共有する祖母、母、娘

という3代の女性を描いた『さらばラモーナ』を中心に、公の歴史では決して取り上げられることのなかった、カタルーニャの伝統的な女性の歴史を考察する。小説の中でもっとも古い時代に属するのは1874年生まれと考えられる祖母であるが、彼女の人生には、中世から連綿と連なってきた幾世代もの女性たちの人生に共通する要素が見られる。それをロッチは「くり返し」の人生とみなしている。その後の世代である母と娘の人生も、やはり「くり返し」である。しかし、そんな彼女たちでも「大文字」の歴史の流れと無縁ではない。ロッチはまず、彼女たちの存在を実証するために女の系譜を構築し、次に、「大文字」の歴史の流れの中で、1970年代前半こそ伝統的な女性の生き方に訣別する「時」であると判断して、ラモーナに別れを告げる。つまり、女性として新しい生き方を模索する意志を表明したわけである。それが、タイトルの「さらば」という言葉に示唆されている。

第二章「自由獲得の戦い—ムンサラット・ロッチによる内戦の位置づけ」では、内戦時に女性の自立の萌芽が確かに見られたことを明らかにする。『さらばラモーナ』のプロローグとエピローグには、暴力的な経験乗り越えて、自立した女性の経験が語られている。また、『さくらんぼの実るころ』と『すみれ色の時刻』には、内戦でいかに女性たちが活躍したかが具体的に描かれている。その活躍の中には「戦時の愛」も含まれている。

第三章「後退—敗戦後のカタルーニャ」では、敗戦後のカタルーニャの状況を分析する。フランコ体制による言語統一政策によって、大方のカタルーニャ人が「自分ではない者」になって生きることを余儀なくされた。それは「自由」を求めるカタルーニャにとっても女性にとっても大きな「後退」であった。ムンサラット・ロッチは、敗戦がその後のカタルーニャ人の精神形成に大きな影響を与えたと考えて、敗戦後のカタルーニャを様々な角度から検討している。『さくらんぼの実るころ』ではジュアン・ミラルペシュとアルモニア・カレラスに見られる亡命の問題、『日常オペラ』ではウラシ・ドゥックとアルタフーリャ夫人による過去の書き換え、『妙なる調べ』ではマラジャラーダ氏によるユートピアの構築という具合である。この世代の苦悩は、内戦を経験していないムンサラット・ロッチの世代にも引き継がれていく。

第四章「抵抗、挫折、解放—ムンサラット・ロッチ世代のカタルーニャ」では、伝統的な女性であり、無意識のうちに敗戦の影響を受けていたロッチ世代の主人公たちがどのような経過をたどって真の解放に行き着くのかを探る。『さらばラモーナ』から『さくらんぼの実るころ』にまたがって、フランコ体制時の彼女たちがいかに抑圧的な状況に置かれていたか、また、いかにしてそれを乗り越えて、理想の女性像である「新しい女」、「強い女」に到達したかが描かれている。しかし、『すみれ色の時刻』では、その「新しい女」、「強い女」というイメージが幻影に過ぎなかったことが明らかになる。それによって、アイデンティティの危機に陥った主人公たちは、解放の思想、フェミニズム、《母》、神話、《女のエクリチュール》を模索、あるいは再考することによって、それを克服しようとする。その後の作品である『日常オペラ』では、アンダルシア出身の少女が主役の座を与えられて、移民の目から見たカタルーニャを提示している。最後の長編である『妙なる調べ』では、アスパルデーニャという男性の主人公を通して、カタルーニャ主義や左派の活動が俎上に載せられている。それを見つめるのが、ビルジニアことムンサラット・ロッチである。彼女は20年前の学生時代を回想しながら、真の解放とは何かを探る。